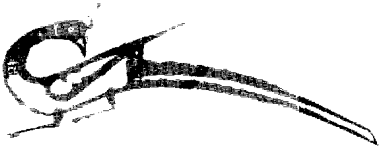
講座イスラム 4

イスラム・価値と象徴

板垣雄三 編

講座イスラム 4

イスラム・価値と象徴



板垣雄三 編

筑摩書房

講座イスラム4　イスラム・価値と象徴

1986年12月20日　初版第1刷発行

編者　板垣雄三
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社筑摩書房
郵便番号101-91　東京都千代田区神田小川町2の8
電話　東京（291）7651（営業）
東京（294）6711（編集）
振替　東京 6-4123番
© Y. Itagaki
1986
Printed in Japan

ISBN 4-480-35704-1　C0322

多田印刷・和田製本
乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい．送料小社負担にてお取替えします．

講座イスラム4

イスラム・価値と象徴

目　次

編者まえがき……板垣雄三　1

1　イスラーム文化と理想的人間像……黒田壽郎　9

一　イスラーム文化の固有性　10

二　イスラームの世界観　13

三　イスラーム的人間の位置　20

四　認識の一元性　27

2　価値観と評価（トルコ社会におけるナムスをめぐって）……松原正毅　35

一　トルコ社会の悪罵と讃辞　36

二　英雄伝説『キョルオウル』から　43

三　名誉と復讐　48

3　ムスリムの自然観（カビール人の事例から）……宮治美江子　55

一　カビリー地方の自然とカビール社会　58

二　カビール人の農事暦および農耕儀礼と自然観　61

三　カビール人の時間観　73

四　カビール人の世界観と空間認識　75

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五　マグリブ文化の多元性　79

4　イスラムの歴史観　三人兄弟の歴史……花田宇秋　85

一　ミーラージュとアブド・アッラフマーンについて　87

二　『アブド・アッラフマーンのミーラージュ』　89

5　イスラム世界の教育……池田　修　115

一　イスラム教育の理念　116

二　初等教育――クッターブ　120

三　イスラム教育の中心――モスク　126

四　その他の教育機関　135

6　イスラム社会の女性　エジプトの場合を中心に……奴田原睦明　141

一　近代エジプトにおける女性の諸問題　143

二　管理される農村の女性の性　148

三　都市における女性解放のプロセス　155

四　作家たちによる告発　161

7 族認識から見た家族……片倉もとこ 169
一 さまざまな族結合 171
二 族認識の特性 177
三 家族の成り立ち 181
8 イスラムの都市空間……木島安史 195
一 空間としての都市 196
二 イスラム初期の都市 199
三 商工都市としてのイスラム都市形態 204
四 イスラム都市の公共空間 212
文献案内 242
索引

編者まえがき

講座イスラム第四巻として、この『イスラム・価値と象徴』をここに読者の手に委ねる。

これまで、われわれはイスラムの思想・歴史・社会について学んできた。本巻では、関心の焦点は人間に、しかもことさら人間の生き方ということに置かれている。この焦点は、いわば社会的価値、価値＝態度体系、基本的パーソナリティ構造、あるいは文化のエートスといった問題群にかかわるものだと言ってもよい。

「イスラム的に生きる」とは、一体どのようなことなのであろうか。そしてまた、「イスラム化する」とは、いかなる事態が生じることであるのか。つまり、イスラム的人間であるとき、あるいはイスラム的人間になろうとするとき、その人はどのような生き方を志向し、どのような動機づけによって物事の軽重を見分け、何を基準にして生活のなかでの選択をおこなうことになるのか。何にこだわり、何を生き甲斐とし、何を美しいと感じ、何を目標に生きようとするのだろうか。しかも「イスラム的に生きる」という課題が人間に向かって投げかけられ、実際そのように生きようとしたりする人が多数出現するのは、そもそもなぜなのか。またそのことは、いかにして起こるのか。

これらの問いに対する解答を模索するために、イスラムにあっては「かくあるべし」と定められているといった規範的な考え方で割り切るのではなく、あくまでも、世界の一角に棲息しそこで泣き笑う人生模様を織りなしている生身の人びとの生活実態を観察し理解しようと努力することから、われわれの設問にとって有意味な事物のコンテクストを見付け出したいというのが、本巻の狙いなのである。

げんにムスリム（イスラム的に生きる者）として――自覚的に、あるいは無自覚的に――暮している人間存在のうちに、またそれらの集合のうちに、すでにイスラムは良くも悪しくも体現されてしまっているはずだからである。ムスリムたちの生きざま、暮らしぶり、生活の思想と知恵、つまりはその人たちが実現している統合的文化の総体に即して、そこから「問題としてのイスラム」を問い直してみよう、というわけなのだ。

もっとも、こんにち、ムスリムの在るところ随処に噴出しているイスラム復興運動の大波は、イスラムの現実に幻滅し、イスラムのあり方の変革を追求してやまぬ動きである。そうした現状批判は、むしろ、ムスリムのイスラム喪失状況というべきものへの自己告発だとも言えるであろう。それゆえ心しなければならないのは、ムスリム社会の人間存在の実相を看破したと称する無責任な傍観者的調査者・研究者がこれこそ「イスラム」だと言って「採集」した「標本」が、実は眺められた当事者にしてみれば、それをこそ打破し克服したいと切に願い、またそのために生活を賭して苦闘している反イスラム的・非イスラム的因子であったりする……そんなことが起こりかねないということなのだ。

考えてみれば、イスラムの歴史とは、ムスリムたちが自分たちの社会・文化の内側の問題に、そして自分たち自身の内面の葛藤や矛盾に、厳しい反省のまなざしを向け続けてきた歴史だったのである。社会の汚濁を批判して宗教の原点あるいは本質の回復を求め、アブラハムの宗教の復興を唱えて巨大な社会革命をなしとげたのは預言者ムハンマドであったが、これにならって、各時代のムスリムたちのなかからは、「現状」の反イスラム性を糾弾する声が繰り返しあがったのであった。現代のイスラム復興の気運も、それは決して単に近代西欧文明との対決などと言って片付けられるべきものではなく、歴史的自己批判を積極的に継承しようとするものなのだと言わなくてはならない。

したがって人間存在の次元で言えば、ムスリムがつねに、――処世の平坦なる日常性のなかでも、人生の分岐点における一か八かの決断の局面でも――意識的にまた無意識的に、自己変革と自己教育とを迫られているといった現実、それこそがイスラムなのではないか、という見方も成り立つのだ。礼拝に先立つ浄めも、断食も、巡礼も、「これからそれを行なう」という意図表明によって開始される。人間はニーヤによって自己の行動の掌握者になれる、と考えられているからだ。ムスリムは否応なくニーヤの連鎖のなかに生きている、とも言えるだろう。例えば、暁に響きわたるアザーン（礼拝の時を告げる呼びかけ）の声でめざめる。礼拝のために起き出すも、ふて寝をしてしまうも、その人の意志によるのだ。こうしてムスリムは、みずからの日常の行動の一齣一齣をさえ、それがイスラムにとって正の方向であるか負の方向であるかを問わず、主体的な意図確定によって合理的に設計することを要求されているのである。イスラムはムスリムたちの生き方によって体現され、彼らの生活のなかに表現されているに違いないが、しかし同時に、ムスリムたちがたえず自分たちの生の「現状」を逸脱や彷徨であるとみずから戒めているのだということを忘れてはならないだろう。コーランの冒頭（開巻の章）に述べられる言葉が正しき道への「導き」の希求であるということに示されるごとく。

つぎに注意を払わなければならぬ点は、ムスリムたちの考え方において、理想と現実との分裂、たてまえとプラクティスとの間のギャップを積極的に認めていこうとするところがあるように見えることである。むしろ、たてまえ論と実際論とをたえず折衷していくことをたてまえとしている、と言ってよいかもしれない。

これは、すでに歴史的に思想や社会システムの問題としても、顕著に認められることであった。イスラム的立場のエッセンスを凝縮したものと言われるムスリムの信仰告白が「神は唯一であり、ムハンマ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ドは神の使徒である」として示されるように、タウヒード（ひとつにすること。本巻第一章で黒田壽郎氏は「一化」と訳される）はムスリムの信仰のもっとも重要な基礎だとされている。宇宙万物はひとつの存在によって創造されたのである。コーランもまた被造物なのではないかという疑問に対して、それを「神の言葉」として受けとめている信者たちの気持は、音声や文字としてのコーランは被造物だとしても、意味としてのコーランは創造されたものではなく永遠・絶対だ、という論理の支えを与えられた（本講座第一巻の索引により「コーラン創造説」参照）。イスラムでは、立法者は神のみであって人間が法（シャリーア）を定めることはできない、ということが不動の原則とされている。人間にできるのは、神の意志や命令をコーランから聞き分けることであり、シャリーアを解釈し適用することだけなのだ。しかし解釈をきりひらくための方法とルールが決められていくなかで、ウンマ（ムスリムの共同社会）の合意（イジュマー）が神の意志・命令をあらわすものとされるのである。民の声は神の声ともなり得る（第一巻索引「イジュマー」参照）。イスラムには祭司・僧侶・聖職者は存在しないが、ウンマの社会的承認（イジュマー）によって権威を保証された学者たちが法解釈（ウラマー）の専門家集団として活動した。彼らの知的営為を通じて、神の法はそのたてまえを守りつつ、人間の創意工夫と社会の共同利害とを媒介にして自己増殖・自己展開をとげたのである（第一―三巻索引「ウラマー」参照）。現代の大統領・国王にいたるまで、支配者は、金曜日の集団礼拝の説教（フトバ）のなかで自分の名前を挙げさせる忠誠誓約（バイア）によって、統治のイスラム的合法性を確保してきた。悪逆無道の暴君といえども、バイアによって、すでにウンマの支持と承認とをとりつけたのだということにすることができたのである（第二、三巻索引「バイア」参照）。

理想と現実、たてまえと実際の使い分けは、こんにちのムスリムの日常生活のなかでも、さまざまな形をとって貫いていると考えられる。枚挙と折衷の論理方法が生活のすみずみにいきわたっている、とも言えよう。そもそも預言者ムハンマドがうち立てた巡礼の儀礼が物語る（第一巻第一章六、第三巻第六章一参照）ように、また

諸地域社会のイスラム受容の実態が示す（第二巻第五章など参照）ように、ムスリムは、昔も今も、自分が生を享けた社会とその文化のしがらみのうちに暮らしているのであり、伝統と慣習から自由ではない。他方、交通・交易によって絶えまなく新奇なるものにも晒されるのであって、このことは、近代におけるヨーロッパへの従属とともに深刻化し、そして現代世界の構造変化のなかでさらに激化している。自然および社会の環境条件の相違は、ムスリムの生き方に影響を及ぼさずにはおかないし、また、社会あるいは国家のなかでムスリム人口が多数を占める場合と、少数者でしかない場合とでは、ムスリムの生活条件もまったく異なるものとなるのは言うまでもない。だから、ムスリムの生活現実は一様ではあり得ないことになるのだ。たてまえと実際との結合の仕方も一律ではない。個別の事例を安易に一般化できぬことは、もちろんである。

しかしながら大事なことは、個人のレベルでも集団のレベルでも、イスラム化の過程が、右のような事情に基づく生態の多様性を許容しつつ、強烈な形で人間と社会との都市化・文明化を惹起し推進することである。イスラムはいわば強力な漂白剤として作用して、異なった文化に属する人びとを徹底した合理主義、個人主義、普遍主義、関係性の論理（相対主義）に同化させ、統一性を与えていくように見えるのだ。こうして、枚挙と折衷の論理が一挙に統合の論理へと飛躍していく。個別性と多様性とが限りなく一に向かって収斂し、一がまた限りなく個別性と多様性とに向けて展開する、とも言えるだろう。外に向かっても内に向かっても、イスラム化は人間を「都市的」に生きる存在へとつくり変え、商業化＝政治化させるのではなかろうか。本巻成立の根拠は、イスラムの場合、スイスやタイの農民・市民の人間像からキリスト教や仏教を論じるのとはいささか状況が違うということにも由来するのである。

さて、人びとのあくまでも個別具体的な生活現実のなかでこのような統合性が実現されるとすれば、

それはいかなる筋道によってであろうか。あるいはまた、イスラムのその統合性なるものは、人びとの個別具体的な生活現実のただなかに、どのようにして発現するものなのであろうか。このような問題について研究し考察するためには、いかなる視点、いかなる手続き、いかなる議論の組み立てが必要だろうか。

時空、宇宙、自然、動植物、人間、社会のあらゆる存在とあらゆる関係とが神の全一的支配に服すべきだとするイスラムの立場は、彼岸志向とか現世重視といった問題分割にも、霊・肉の二元論にも反対する。精神も肉体も兼ねそなえて、一個の人格として存在する一人ひとりの人間が、神に対していかなる関係に立っているかが、まず問いつめられるのだ。しかも、それは人と人、人と自然の関係と深く関連してもいる。責任主体としての個人は、社会的存在として、また自然との一体的関係において創造されたと考えるからだ。このような関係の場に一主体として生きる人間の存在の仕方は、全人的に、総合的に問題にされなければならぬ、ということになる。

しかし本巻では、あえて章別に、理想的人間、価値観、自然観、歴史観、教育、女性、家族、都市という個別の問題を、各執筆者にそれぞれ独立に論じてもらうこととした。すでに見たようなイスラム的立場を別としても、本来統合的な視点で扱われるべき人間の生き方の問題を、バラバラに腑分けしてしまおうというのでは決してない。「講座」というものの性質上やむなく採用した形式だなどとも言うべきではない。むしろ、読者とともに統合的把握を目指すための「戦略的」プログラムの編成を企てたつもりなのである。そこで特徴的な問題を連ねたひとつのネットワークが組立てられた。そして事実、執筆者諸氏は、おのおのの個別課題の論述のなかに、人間とその生き方に対する統合的視野への含蓄を豊かに埋め込んでくださったと確信している。

はじめにも述べたごとく、われわれのアプローチは規範的なものではなく、具体的・具象的な生の姿を見すえようとするものなのである。各章は、音や夢（これらはそれぞれにムスリムの生活にとって深遠な意味をもつものである）、さらには文学作品における形象などから手がかりを得ている場合をも含め、執筆者のすべてがムスリムたちの社会に深く分け入って暮したおのおのの直接的な体験、恐らくはそこでの人間的対立・共感・相互滲透・自己疎外などを踏まえてはじめて記述が可能となった認識や知見というべきものなのであろうと、編者としては観ている。だが、各執筆者はそれぞれの専攻分野に応じて、それをまことにバラエティに富んだ鋭い問題提起へと高めてくださった。構成にあたって、編者としては、はじめから各章の叙述の形式にむしろそれぞれ独自の持ち味が盛り込まれることを期待していたし、また例えば、やや特殊な事例とも見えるトルコ社会やカビール地方の人間の生き方から、むしろイスラムとは何かを一般的に論じ直すための作業の資料を得たいものだとも考えていたのである。

読者には、以上説明した本巻の趣旨を十分に汲んでくださり、自由な、かつ透徹した読み込みによって、イスラム理解の地平を思い切って拡大してくださるよう、お願いしたい。

一九八六年十月

板垣雄三

1

イスラーム文化と理想的人間像

黒田壽郎

「文化史の真の問題はつねに形式の問題であり、社会現象の構造と機能の問題なのである」

J・ホイジンガ

一　イスラーム文化の固有性

「発展途上国」と文化

西暦七世紀に登場し、今なおモロッコからインドネシアにかけて十億に近い信徒を擁するイスラーム。しかしこの教えはここ数世紀の間沈滞し、その信奉者から成る共同体のほとんどすべては、発展途上地域に位置づけられる境遇に甘んじている。それゆえ多くの東洋学者は、イスラームを「死んだ価値」と評価するのが、つい先頃までの常套手段であった。最近のイラン・イスラーム革命が、もっぱら中世への回帰と把えられる基盤は、充分以上に醸成されていたのである。

他方、技術革新を挺子（てこ）とする大規模な産業化の影響は地球上で猛威をふるい、本家の西欧文化の活性をも脅かす流儀でその余の文化の隷属化を進行させている。先進諸国、つまり「中央」の側は、その豊かな経済力によって高度な技術開発を行ない、その成果は強力な政治力に支えられて周辺地域との較差の拡大に奉仕する。このようなメカニズムが着実に進行しつつあり、抵抗概念としての「中央と周辺」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com